

北信濃里山通信 vol.28

2017年8月14日発行

巻頭言 茅刈りがお金を生み出した ～オオルリシジミ生息地の維持作業がもたらす経済的価値～

北信濃の里山を保全活用する会会長 井田秀行

里山の保全活動をボランティアだけで継続させることは一般に困難です。活動を持続可能にするためには必要経費に加え、対価もある程度はあった方がよいと思います。かといって、それらを会費や公的な補助金・助成金に頼るのも避けたいところです。

本会では2014年より、オオルリシジミが好む草原環境を維持するために茅（カヤ＝スキ）を刈り取って茅葺き屋根の材料として売り渡し、その収入を会の運営費に充てています。会報でもお知らせしているとおり、オオルリシジミ生息地や戸狩温泉スキー場グレンデの一角をお借りして毎年晩秋、会員の皆さんや信州大の学生さんと茅刈りを行っていますが、その収入は初回（2014年秋）で36,000円、翌年75,360円となりました。

茅の品質は、刈り取りのタイミング（積雪直前がベスト）や冬期間の保管環境（湿気は大敵）によって大きく左右されます。事実、初回は収穫した茅の1/3が、保管状態が悪くカビが生えてしまい売り物になりませんでした。自然の資源をお金に換えるということがいかに大変か、身をもって知った次第です。ともあれ、こうして私たちが運営資金の一部を自力で調達できるようになったことは目に見える成果の一つであると言えます。

もっとも、資金調達は目的ではなく手段。『北信濃の里山を保全し活用していきたい』という思いがあってこそこの活動は、これまで通り地道に継続していきたいと思います。引き続き皆様のご協力をお願いいたします。

※ 昨年11月にオオルリシジミ生息地で採取したカヤは、5月20日に保管小屋から搬出して、売却先の「小谷屋根」に買い取っていただきました。カヤは調整後30cm束にまとめられ、59束となり、一束1,000円で合計59,000円、運搬調整費18,000円を差し引いて41,000円が会の収入となりました。

昨年は悪天候もあり、カヤの採取量が少なかったですが、品質は良好なようで、しっかりお金をすることができました。今年も11月にカヤ刈りを予定しています。



カヤの搬出作業(5月20日)

活動報告など

・オオルリシジミ生息域外保全での放蝶と観察会

オオルリシジミの放蝶作業を5月6日に実施。例年行っている戸狩地区の放蝶地に蛹60頭を分散して鉢に入れ埋設、看板設置も行いました。後日、いくらかカビが生えて死亡した蛹も見られたため追加放飼を実施。5月下旬は気温が低かったためか成虫の羽化は例年よりも幾分遅れました。

成虫の初確認は5月31日、翌日の6月1日は会員の花崎さんによりオス2頭確認されました。

また、草原性のチョウで、希少種のミヤマチャバネセセリが昨年に続いて観察されました。

放蝶地では紫色のスミレ（「スミレ」という種名）が咲いており、良好な草地が維持されていることがうかがえます（以下の写真）。



オオルリシジミ♂



ミヤマチャバネセセリ



スミレの花

6月4日は本年で6回目となったオオルリシジミ親子観察会。集合場所から放蝶地までは山麓の登り道を徒歩。途中、放蝶地から少し離れた草地にオオルリシジミ食草のクララを参加された方々で植付け。放蝶地以外は、食草のクララは少なく、植栽して生息域を広げたい考えです。

この日、観察場所では風が強く時折、雨がぱらつく悪天候でしたが、何とか草に止っていた1頭を確認。参加者みなさんが観察することができました。

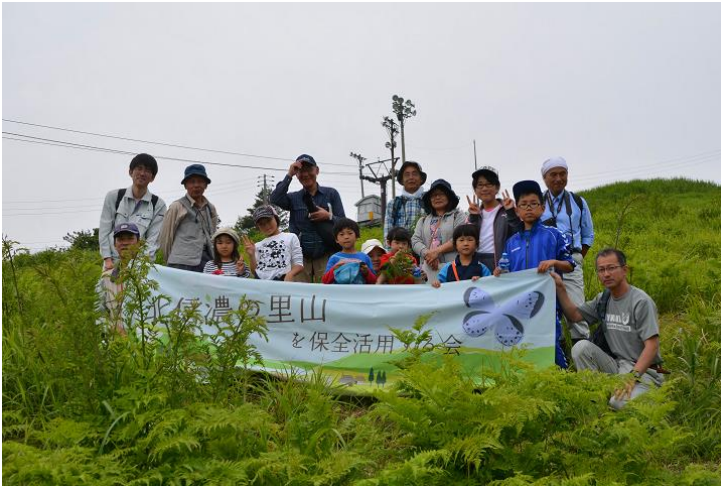
観察会は6月18日にも実施。当初は本来の生息地の予定でしたが、当地でオオルリシジミが確認されていなかったため、急遽、放蝶地で行うことになりました。放蝶地でのオオルリシジミの発生は終盤に入っていましたが、この日は天候もよく、各参加者はそれぞれで3～10頭、一人あたり平均で5.5頭の成虫を観察。産卵シーンも見られ、参加した子供たちにも興味を持ってもらえたかと思えます。



クララの植付け作業



オオルリシジミ観察：「メスが止ってる！」



観察会集合写真



ハナニガナの花で吸蜜するみ

放蝶地での発生盛期は6月10日、新鮮な個体からやや飛び古したものまで、合計13頭を確認、放蝶地から少し離れた谷筋でも見られ、飛翔して生息範囲を広げる様子がうかがえました。

ハナニガナやアカツメクサなどの花に訪れて吸蜜する行動が観察されましたが、成虫の活動のためにも蜜源となる豊富な植物が必要のように感じられました。なお、放蝶地と周辺では、タニウツギ、オドリコソウ、コナスビ、スミレ、フランスギク、シロハナニガナ、マムシグサ、ナルコユリなどの植物が花をつけていました。

オオルリシジミ成虫終見は6月29日で、かなり翅が傷んだメスがクララの二番芽、三番芽に産卵していました。来年の自然発生の拡大も期待できるようです。

放蝶地の背景にはミズナラやブナ林が広がっており、6月下旬のこの時期は、林縁の梢では森林性のチョウであるミドリシジミの仲間(ゼフィルス類、写真はその仲間のウラクロシジミ：左、ウスイロオナガシジミ：右)が舞い、改めて、この地がチョウ類の観察の好適地であることがうかがえました。



以上、会員の花崎さんの情報です。ありがとうございました。

・オオルリシジミ生息地の状況

会員の三井さん、坪井さん、事務局の宮澤さんが中心となり、5月19日に保護区ロープ設営と看板設置、以後適宜草刈りなど環境整備を行いながら、6月10日に監視カメラを設置しました。

ところが、本年は全般的にチョウの発生が少ない様子……。

5月28日以降、6月30日まで幾度とオオルリシジミ成虫の発生確認調査を行いました。結局、本来の生息地ではその姿を確認することができませんでした。

当地で例年群れ飛んでいるウスバシロチョウやヒメシジミも今年に限ってはチラホラという状況で、「どうなっているんだろう……？」という感じです。

花崎さんにより、7月17日に幼虫の調査を行いました。見られた39の幼虫はいずれも体長10mm以下でルリシジミの幼虫？と思われるものが多く、オオルリシジミの幼虫と確信できるものは見つけられませんでした。来年の発生が心配されるようですが、またチョウの舞う姿が見られることを願いたいものです。



保護区ロープ設営



クララの幼虫・ルリシジミ？

・オオルリシジミ生息地での野鳥調査

5月28日当会会員で鳥類専門家の丸山和麻さんとオオルリシジミ生息地での野鳥調査を行いました。13:20～15:00の間で、ヒガラ、サシバ、トビ、ウグイス、ツバメ、ノスリ、ハシブトガラス、メジロ、ホオジロ、アオバト、アオゲラ、キビタキ、ヤマガラ、ニュウナイスズメ、ヒヨドリ、コガラ、イカル、シジュウカラ、サンショウクイ、カワラヒワ、カケス、エナガ、モズ、ツツドリ、以上24種の多様な鳥類が確認されました。

この時期は多くの鳥類が繁殖期のように、鳥たちの縄張り活動やノスリの求愛飛翔も観察されました（右写真のノスリは会員の花崎さんにより当地で7月24日に撮影）。また、当地は里山に近い環境ですが、コガラなどの亜高山～山地性の野鳥も確認され、興味深いところです。引き続き、今後も調査を行っていく予定です。



・オオルリシジミの継代飼育

3月の定期総会で「オオルリシジミの飼育」について講演された丸山潔さんから飯山産のオオルリシジミの蛹を引き渡され、放蝶分を除いた残りを会員の服部さん、三井さん、佐々木さん、池田さんで分けて、羽化～交尾・産卵～幼虫飼育を行いました。

みなさん、継代飼育は初めての経験で成虫の羽化取り込みや産卵作業など苦労され、失敗もありましたが、何とか全体で約50頭の蛹が得られました。

最初から順調にはいきませんが、来年以降も継続し、飯山での継代飼育・系統保存を安定化させたいです。



ネットがけて交尾産卵



アリが集る幼虫の放飼育



終齢幼虫の蛹化準備

編集後記

オオルリシジミのシーズンも終了、生息地で成虫が確認できなかったのが気がかりです。今年はチョウの発生時期が遅れ、ギフチョウやオオムラサキなども発生が少なかったという声もあちこちで聞かれましたが、気象なども影響したのでしょうか・・・？このような年があることもふまえ、飯山のオオルリシジミ、絶やすことがないように生息域外保全や系統保存の必要性を改めて感じるところです。

オオルリシジミ保全についての御意見、里山の生き物情報などお寄せいただけましたら幸いです。

発行者：北信濃の里山を保全活用する会 会長 井田秀行
事務局：〒389-2253 飯山市大字飯山1434-1
飯山市ふるさと館内
TEL/FAX：0269-67-2030
E-mail：furusato@city.iiyama.nagano.jp
編集者・事務局長：福本匡志